

27U-pm01S

皮膚上のアシネトバクターは黄色ブドウ球菌の細胞傷害性を増悪させるか
○井上 瑞菜¹, 張 音実¹, 杉田 隆¹ (¹明治薬大)

【背景】われわれはこれまでに、マラセチア関連皮膚疾患（アトピー性皮膚炎、脂漏性皮膚炎など）患者皮膚には、健常人皮膚に比べて *Acinetobacter* が優位に存在していることを報告してきた(137 年会)。*Acinetobacter* は多剤耐性や日和見病原体として注目されているが、皮膚疾患に関する知見は少ない。また、皮膚には多種多様な微生物が存在しており、それらは相互にバランスを保持することで健康な皮膚環境を維持している。これらのバランスの破綻は皮膚疾患に進展する可能性がある。本研究では皮膚における *Acinetobacter* の役割に着目し、皮膚疾患との関係について検討した。【方法】1. *Acinetobacter* 叢の網羅的解析:アトピー性皮膚炎(AD)、脂漏性皮膚炎(SD)患者および健常人(HS)の皮膚鱗屑中の *Acinetobacter* を Illumina MiSeq を用いて解析した。2. 細胞傷害性の評価: *Acinetobacter* sp.単独あるいは皮膚常在微生物との混合感染を行い、正常ヒト表皮角化細胞(NHEK)に対する細胞傷害性を LDH およびトリパンブルー染色を用いて評価した。【結果および考察】1. SD および HS 皮膚には複数の *Acinetobacter* spp.が存在していた。一方で、AD 患者皮膚では単一菌種で存在している割合が高く、その中でも特に *A. ursingii* が優位であった。2. *A. ursingii* は NHEK に対して約 2 倍の細胞傷害性を示したが、*Staphylococcus* spp.および *Malassezia* との共培養では有意な変化は見られなかった。また、*A. ursingii* 培養上清は *Staphylococcus* spp.の細胞傷害性を増加させた。*S. aureus* は AD の増悪因子の一つであることから、AD 患者皮膚に共存する *A. ursingii* が AD の病態に関与している可能性が示唆された。